メッセージアウトライン
マタイの福音書7：24～29
「家を建てた二人の人」

[24-27]「ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした」

いよいよイエスの山上の説教の最後の箇所となった。前回は世の終わりのさばきの時に、主イエス・キリストに向かって「主よ、主よ」と呼びかけ、「私はあなたの名によって預言、悪霊追い出し、奇跡などの多くの良い働きをしたではありませんか」と言う者が必ずしも天の御国へ入れるわけではなく、「天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」とイエスは教えられた。「主よ、主よ」と告白しつつ、人目を驚かせる奇跡的なわざを行い、それを誇ることができたとしても、その内面に真にイエス・キリストを救い主と信じ、より頼む信仰がなく、神のみこころにかなわない偽預言者のような生き方をしているならば、それは悪い木が悪い実を結ぶようなものであり、やがて世の終わりのさばきの時には「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け」と宣告されることになるのである。
そしてそれとは正反対にマタイ5章からこの7章の最後に至るまでに教えられた、自分の無力さ、罪深さを思い、真にイエス・キリストを救い主と信じ、より頼む信仰から出てくる行い、神のみこころを行う生き方こそ、良い木が良い実を結ぶ生き方であり、そのような者が天の御国へ入るとイエスは教えられた。

今日の箇所はこの山上の説教の最後の結論部分となっているが、実はその結論は7章13節から始まっているのである。13~14節が狭い門のたとえであり、15～23節は偽預言者に用心すること、すなわち良い木と悪い木の結ぶ実のたとえであり、そして今日の家を建てた二人の人のたとえである。この三段構えの結論はいかにイエスが熱心にこの結論を弟子たちに教えようとされているかの現われである。

今日の箇所では二人の人物が登場してくるが、その共通点は何か。①それは彼ら二人とも建てたのは「自分の家」であったという点である。自分の家、マイホームを建てるというのは人生における一大事業である。部屋の広さ、間取り、家具、調度品、快適さ、日当たりの良さ、耐久性、予算等々、様々な要素、検討課題が必要である。

そしてこの二人の人物はいよいよ自分の家を建て始めたのである。②その場所と環境は同じであった。当時のイスラエルは人間の住む場所は湖のほとり、川のほとり、泉や井戸のそばなどに限られていた。そういうわけで二軒とも水の得られる所、そして蒸し蒸し、じめじめした所ではなく、風通しの良い所に建てられたであろう。

並行箇所のルカ6:47~49を見ると、二人とも川の近くに家を建てたということが書かれている。しかし、このマタイの福音書の方では一方が「岩の上」もう一人は「砂の上」に建てたとあり、一見ひどく違う土地のようであるが、ルカ6:48では「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて」とあるので、どちらも表面は砂地であったことが分かる。

③両方の家に襲ってきた試練や災難も同じであった。どちらも、雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲った。→25，27節　洪水、暴風雨である。これは人生において受ける様々な苦しみ、悲しみ、病、試練、困難といったものを象徴している。

次にこの二人の相違点は何か。①片方の家は災害が起こった時も倒れなかった。しかし、もう一方の家は倒れてしまった。しかもその壊れ方はひどいものであった。→ルカ6：49

②片方の家は土台を岩の上に置いたが、もう一方の家は砂の上に土台を置いた。

③片方の家を建てたのは賢い人であったが、もう一方の家を建てた人は愚かな人であった。

この「賢い人」「愚かな人」とはどのような人か。これは一般的に言って、賢い人とは考え深く理性的な人のことであり、愚かな人とは先見の明や知恵のない人のことを指すと考えられる。これらの相違点から考えられることは、結果において彼らに非常に大きな差をもたらしたのは、

① 岩の上に土台を据える賢さがあったかどうかということである。

24節には「わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます」とあり、それはイエス・キリストを神の前に罪深い自分の救い主、罪の贖い主と信じ受け入れ、そのことばに聞き従い、それを行う者、すなわち21節にあるように「天におられるわたしの父のみこころを行う者」のことであることが分かる。単に熱

心であった、人目を引くような働きをした、「主よ、主よ」と告白していた。などの外見だけではなく、この5~7章の山上の説教において教えられた神のみこころを行い、目立たなくてもこの地上の人生において賢く、謙遜に主により頼みつつ信仰生活を築いていくことが大切なのである。
②この信仰生活の土台は誰でもそれを得ようと思えば得られるものである。ルカ6:48では岩の土台は地面を深く掘り下げて得たものだと書かれている。今、イエスがこの山上の説教を語られている場所はイスラエル北部のガリラヤ湖に面したカペナウムという町に近い山の上であるが、このあたりの地層は岩石層の上に砂や土の層が重なっている地帯である。そして慎重な人は家を建てるためには、その砂の層を時には10メートル以上も掘り下げて土台となる岩盤を捜すという。ルカ14:28~30では塔を建てようとする人が予算見積りを怠ったために土台だけできて、後は未完成のまま工事を中止しなければならなかったことが書かれている。ここからも岩の土台を得るためにどれほどの費用と根気と熱心さがいるかということが分かる。同様に費用と時間と根気を惜しまず、自分の救い主なる神、イエス・キリストに土台を据えようとするなら、この岩は必ずあるのである。→詩篇18：2，31、89：26、95：1

③土台は砂ではなく岩に置かなければならない。愚かな人は家の土台を砂の上に置いた。当然それは安上がりで、完成に至るまで時間的に早く仕上がったことであろう。賢い人が建てた家よりも外見的には立派な仕上がりであったかもしれない。しかし、やがて洪水と暴風雨が襲ってきた時には壊滅的な被害を受けてしまったのである。
　イエスは今、ご自分のみことばを聞いてそれを行う人のたとえを語られているのであり、それゆえ、岩とはキリストのみことばであり、そこに土台を置くとは、天におられる父なる神のみこころを行うことなのである。
イエス・キリストのことばを単に表面的に聞き、頭にも心にも何も残らないという人がいるならば、その人は自分とキリストとの間に厚い砂の層が横たわっている人であるのかもしれない。「砂」とは変わりゆくこの世的価値観、時代とともに移り変わる道徳観、思想、哲学、自己中心、偏見、思い込み、気ままな欲望といったバベルの塔を打ち建て、神のみこころから遠く離れ、神を知ろうともしないこの世のすべてのものを代表するものである。　神によって創造された最初の人間アダムは神の定められた戒めを破り、神のようになろうとして堕落し、その罪のゆえに全世界に死と滅びをもたらす者となった。→創世記2:16~17、3:17~19。アダムの子孫として全人類はこの罪と死と滅びの中にある。→すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができない。(ローマ3：23)

しかし、神はすべての人間を死と滅びに追いやることを望まれず、そこに救いの道、和解の道を開いてくださった。神は愛であるがまた義なるお方である。義なる神が罪ある人間を救うためには罪を大目に見るとか見過ごすのではなく、その罪を贖うためにさばかれる身代わりが必要であった。そのお方こそ神の御子なるイエス・キリストなのである。→神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ3：16)、

神の御子、救い主イエス・キリストが私が受けなければならない神のさばきの身代わりに十字架にかかって死んでその罪を贖ってくださった。この堅い事実の上にしっかりと信仰を築き上げる人は砂地ではなく、岩なるキリストに自分の全生活を直結する人である。私たちはみなこの岩の上に土台を据えるべきであり、神のみことばから学び、永遠のいのちに続く働きをなしていく。そうすれば人生の試練、雨や風や洪水も、そして世の終わりのさばきの時にもしっかりと神の前に立つことができるのである。しかし、この岩という土台ではなく、砂の上に家を建てた人は同じ人生の試練が襲って来た時には倒れてしまう、しかもそれはひどい倒れ方であり、この世においても倒れ、また最後の神のさばきの時にも立つことができない。あなたはどちらを望むだろうか。

[28-29]「イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである」

律法学者はモーセ以来の律法の伝承とその解釈に重きを置き、聖書に書かれていないことまで次々と付け加え、人々にその実行を強い、重荷を負わせていたが、イエスはご自分の権威、すなわち神としての権威をもって神のことばとその真実さ、真に何を守り、行うべきか、その本当の意味、正しい解釈、そして福音を教えられたのである。
群衆はイエスのことばを聞いて、確かに彼が単なる律法の学者、教師のようではなく、権威ある者であることを感じ取ったのである。

私たちも今日の箇所で教えられたように、岩の上に土台を据えた賢い人のように、イエス・キリストという土台に信仰の基礎をおいて、天におられる父なる神のみこころを行い、この地上の人生を歩んでいかなければならない。